

文 献 解 題

東南アジアの人文地理学研究 のための基礎的文献（改訂稿）

本 岡 武

1 は し が き

さきに私は「東南アジアの人文地理学的研究のための基本文献」を「人文地理」第15巻第5号（昭和38年10月）に酒井敏明と連名で発表した。しかし、その後わずか2ヶ年しか経過していないが、東南アジアにかんする研究成果が続々と公刊されている。他方、私じしんの文献検索も進展した。そこで、ここに改訂稿を作成しておく。なお、本稿は本誌「東南アジア研究」が連載を企画している「東南アジアにかんする文献解題」の人文地理学編となる。

ここは、まず本稿の目的と限界とをはっきりさせておきたい。

（1）東南アジアにかんする文献目録作成それ自体、とてつもない大きなプロジェクトとなろう。なぜなら、東南アジアにかんする研究は、人文・社会科学部門にかぎらず、自然科学部門においても行なわれてきており、東南アジアを対象としての研究成果は無数にあるといつてよい。しかも、それらの成果は、戦前は東南アジア諸地域を自国の植民地としていたイギリス・アメリカ・フランス・オランダ等の諸国でそれぞれ発表され、戦後はそれぞれ独立した新興諸国によっても発表されている。歴史研究のためには中国史料も無視することはできない。さらに、研究成果あるいは文献としては、図書の形で刊行されたもの以外に、インスクリプションなどの歴史的資料まであげなくても、政府刊行物、新聞雑誌、地図などもおのおのきわめて重要である。

東南アジアを対象地域としてのコレクションは、アメリカ国会図書館の Southeast Asia Section,

Orientalia Division のなかにある Southeast Asian Section であろう（Section Headは有名な東南アジア学者 Cecil Hobbs である）。なお、京大に所蔵されている東南アジア関係の図書リストの作成だけでも容易でない。アジア経済研究所は京大所蔵のアジア関係の図書カードの複製を行なったが、これは不十分なものである。京大東南アジア研究センター発足前の京大東南アジア研究会当時の昭和35～37年、田村実造教授（文学部）が主任となって、京大所蔵東南アジア関係文献目録の作成が進められていたが、残念ながら中止した。京大東南アジア研究センターとしては、その事業計画のうちの図書資料収集整備として、京大所蔵東南アジア関係文献目録の編集をかかっている。ただ現在、研究は現地調査に集中している関係から、このプロジェクトは残念ながら、なかなか実行に移されない実情にある。

（2）私はここで総合的な東南アジア文献目録を作成しようとするのではない。東南アジアの人文地理学的理解のための基礎的な文献を紹介しようとする。いかにすると、東南アジア人文地理を理解するための、入門的・概説的研究を総覧したいと思う。

そのために、第1には、人文地理学の部門に属する文献を主として紹介したい。ただし、これと関連する部門、たとえば文化人類学なり歴史学なりの文献については、人文地理学研究上、どうしても逸することのできないものだけは、とりあげる。

第2には、紹介する文献は戦後、とくに比較的最近の過去10～15年間のものを主としたい。もちろん、1950年代以前のものでも、その考察がいまなお重要なものであって、それに代わるだけのものがいまだ出版されていない場合には、とりあげよう。しかし、戦後の激動してやまない東南アジアについて進められる人文地理学的研究は、時間の経過とともに生命を失うものが多い。これが人文地理学文献の基本的な特徴であって、歴史的研究のための文献とは異なる。しかし、とくに注意すべきは、東南アジアの本格的な研究は主として1950年代から着手されたのであり、その成

果が今日続々と出版されている。そのため、どうしても新しい文献に追われがちになる。これら新しい文献は、また追われるに十分値するものなのである。

第3に、人文地理学の基本文献としては、主として、英語文献にかきることとした。しかし、いくつかのフランス語文献および少数のドイツ語・オランダ語文献も含まれている。東南アジアの basic な文献として、英・仏語以外の欧文はほとんどない。(もっとも、インドネシアについてほりさげてゆくとき、オランダ語文献が必須であるが、インドネシアの現状については、むしろ今日でも英語文献のほうが、はるかにすぐれている。) なお、日本語文献については別の機会に譲りたい。ただ、残念ながら、はっきりいえることは、概説的・入門的な日本語文献は、英語文献にくらべて、はるかに劣る事実である。東南アジアにかんする日本の研究の浅さを示している。したがって、東南アジアの人文地理学にかんする基礎的文献としては、どうしても英語文献を主とせざるをえないのである。

第4に、basic な文献をあげるため、政府刊行物や新聞雑誌などにあまり重きをおかなかった。もちろん、研究を進めるにあたっては、これらの資料の重要なことはいうまでもない。

最後に、人文地理学的研究において、地図の重要なことは、あえて強調する必要はなからう。ことに 1:1,000,000 から 1:50,000 に至る各国政府発行の地図を整備しておくことは、人文地理学的研究の前提条件とまでいえよう。さらに、地図の整備は、地理学者が地理学以外の分野の研究者に協力し、貢献しうる重要な課題である。この東南アジアの地図リストの作成は、私自身の課題であり、近く本誌に発表したいと思っている。

(3) 東南アジア関係の文献目録としては、かなり古くなっているが、文化人類学を中心としたものとして、

John F. Embree and Lillian O. Dotson :
*Bibliography of the Peoples and Cultures
of Mainland Southeast Asia*. New Haven,
Conn., 1950.

がある。新しいものとして、歴史を中心とはするものの、

Stephen N. Hay and Margaret H. Case :

*Southeast Asian History, A Bibliographic
Guide*. New York, 1962.

である。

とくに、季刊誌 *Journal of Asian Studies* が毎年その第5号を文献目録にあてている。これは他の地域についても同様に東南アジアについてのカレントな文献目録として、最も重要である。私はこの仕事を高く評価する。

2 東南アジア一般

東南アジアの人文地理について、まず入門的な役割をはたしうるのは、世界的に権威のある

G. B. Cressey : *Asia's Lands and Peoples*. 2nd ed., New York, 1951.

L. D. Stamp : *Asia*. 10th ed., London, 1959.

N. S. Ginsburg(ed.) : *The Pattern of Asia*. New York, 1958.

J. E. Spencer : *Asia, East by South*. New York, 1955.

P. Gourou : *L'Asie*. Paris, 1953.

の5冊のアジア地誌である。これらの、アジア地誌は、いずれもすぐれたもので、それぞれ特色をもっている。故 Cressey 教授と Stamp 教授は、多年にわたってアジアを専門領域とした米・英地理学の碩学であり、アジア全域にわたって足跡を印している。シカゴ大学の Ginsburg 教授の編著は、両碩学にくらべると、ぐっと若い世代の地理学者を動員している。U.C.L.A. の Spencer 教授も、若い立場を代表する。Gourou 教授の *L'Asie* は、フランスの人文地理学の所産であり、事実そのものより、むしろ考え方を重視する。いずれにしても、東南アジアの地理を理解するためには、アジア一般の地理をわきまえておくことが必要である。この意味で、古典的なアジア地誌としては、Cressey, Stamp, Gourou 教授の著書、近代的な変革過程に力点をおくものとしては、Ginsburg と Spencer 両教授の著書を推賞する。

東南アジア地誌の専門的なものとして、まずあげられるのは、

E. H. G. Dobby : *Southeast Asia*. 5th ed., London, 1956. (小堀巖訳, 東南アジア, 東京, 昭36)

—— : *Monsoon Asia*. London, 1961.

の2冊である。これらは、Dobby 教授のシンガポー

ル在勤のときの所産であり、とくに *Southeast Asia* は、これまで刊行された唯一の東南アジア地誌であって至るところで見かけられるものである。しかし、その内容については、東南アジアの各地域の専門家から批難されているところが多く、かなり粗雑なものだとの定評さえある。たとえば、*Monsoon Asia* のうちの日本についての叙述を見られたい。しかし、このような悪口がいったにせよ Dobby 教授の著書がわが国で翻訳出版されるほどに、わが国の東南アジアについての人文地理学的研究のレベルは低かったといえよう。

東南アジアの地誌として、最もすぐれた決定版ともいふべきは、

C. A. Fisher : *South-east Asia, A Social, Economic and Political Geography*. London, 1964.

である。フィッシャー教授は現在シェフィールド大学に勤務しているが、太平洋戦争勃発にさいし日本軍に抑留されたのをはじめとして、東南アジアに20年にわたる経験をもつ。そのフィールド・サーバーと豊富な文献をもととした彼の論文

C. A. Fisher; "Southeast Asia," in W. G. East and O. H. K. Spate(ed.): *The Changing Map of Asia*, London, 1950.

はすでに光っていた。ここに刊行された 850 ページ、108表、110図からなるこの大著は、東南アジア地誌として圧巻である。とくに、その第1部地理的・一体的としての東南アジアは、東南アジアの性格・自然地理的環境・歴史的発展を述べた東南アジア地誌総論である。地誌は、赤道島嶼部(インドネシア)・熱帯大陸部(ビルマ・タイ・インドシナ)・赤道大陸部(マラヤ)・熱帯島嶼部(フィリピン)にわけているが、それぞれの地誌は、いささか精粗まちまちの感じもあるが、国別の地誌としても、きわめてすぐれている。また本書の文献目録は、東南アジア人文地理関係目録としては、最も優秀である。

東南アジアの地理学的特質は、そのunityとdiversityとの2面がある。これは、自然的環境だけでなく、政治的・経済的・社会的あらゆる側面に見られる。これを最初にとりあげた論文として、

J. O. M. Broek; "Diversity and Unity in Southeast Asia," *Geographical Review*, 1944 or in P. L. Wagner and M. W. Mikesell (ed.): *The Changing Map of Asia*. London,

1950.

がある。

地誌を得意とするフランス人文地理学者も東南アジアを当然にとりあつかっている。とくに、フランス人文地理学の伝統——可能性論(possibilisme)にもとづく東南アジア地誌として、今日もはや古典になっているが、インド・中国をふくめての、

Jules Sion : *Asie des Moussons*. Géographie Universelle, Tome IX, ge Partie. Paris, 1929. がある。この Sion 教授のモンスーン・アジア論を、マラヤ・インドネシア・ボルネオ・フィリピンの半島・島嶼部に適用して、「マレーの世界」と題したのが、Ch. Robequain : *Le Monde Malais*, Paris, 1946. (*Malaya, Indonesia, Borneo, and the Philippines*. New York, 1954.)

である。Geographies for Advance Study の一冊として英訳が出されているほどに、すぐれた地誌である。さらに、

P. Pedelaborde : *Les Moussons*. Paris, 1958.

は、フランス人文地理学の伝統としてのモンスーン地理農業論でありデータも新しい。

同じくフランス人文地理学の所産として、東南アジアの国別の地誌概説が Larousse 版の、

P. Defontaine (ed.): *Géographie Universelle Larousse*. Tome II, Paris, 1959.

のうちの、「インドシナ半島」と「スンダ海島嶼」に収められている。簡潔な叙述ではあるが、美しい地図と写真とに助けられ、国別地誌としては、すぐれている。上述の Stamp 教授がビルマとマラヤ、Spencer 教授がインドネシアとフィリピンを分担しているほか、フランス人の Rüe 教授がタイ、Delvert 教授がカンボジア、Vidal 教授がラオス、Azambre 教授がベトナムを執筆している。

ここで、Hall 教授の序文、東南アジアの歴史がおさめられた近刊、東南アジア地図帳

Atlas of South-East Asia. Amsterdam, 1964.

をメンションしておかなければならない。これは、Djambatan 社刊行、5色版60ページにわたり、東南アジア・フィリピン・インドネシア・シンガポール・マラヤ・タイ・インドシナそれぞれの一般図としての地形図のほか特殊図として気候・植生・地質・土壌・政治・人口・民族・土地利用・産業・交通図および首

都都市計画図をおさめている。東南アジア研究者の座右におかれるべき地図帳である。もちろん、これは atlas であって map でない。だから、たとえばタイは 1:4.5million という小縮尺で示されている。しかし、map としてなら、東南アジア全体ではアメリカ軍編纂の 1:1million がある。また、より大縮尺のものとしては、タイでは、きれいな5色刷の 1:250,000 がある。したがって、本書は map としての目的をはたす必要はなく、atlas として十分な価値をもっている。

以上は、主として地理学者による東南アジア地誌である。東南アジアの人文地理学研究のためには、どうしても見のがすことのできない関連分野での業績をとりあげておこう。

東南アジアの自然的基礎、たとえば地形・気候・土壌・水・植生・動物などについて、まとまった文献はとぼしい。しかし、熱帯降雨林についての Richards 氏や、湿潤地土壌についての Pendleton 博士らの業績を逸することができない。

P. W. Richards: *The Tropical Rain Forest*. Cambridge, 1952.

G. F. Carter and R. L. Pendleton: "The Humid Soil: Process and Time." *Geographical Review*, 1941.

東南アジアの歴史については、最高権威の Hall 教授の大著のほか、Harrison 教授の簡潔な概説、および近刊の Cady 教授の大著がある。

D. G. E. Hall: *A History of Southeast Asia*. London, 1955.

B. Harrison: *Southeast Asia, A Short History*. London, 1960.

J. F. Cady: *Southeast Asia—Its Historical Development*. New York, 1964.

文化人類学的業績としては、Heine-Geldern 教授の「東南アジア人」をはじめ、多くの文献がある。

たとえば、

R. Heine-Geldern: "Sudostasian" in G. Buschan (ed.): *Illustrierte Völkerkunde*. Stuttgart, 1923.

—: *Conception of State and Kingship in Southeast Asia*. Cornell University Southeast Asia Program, Data Papers No. 18. Ithaca,

N. Y., 1956.

C. Du Bois: *Social Forces in Southeast*. Cambridge, Mass., 1959.

K. P. Landon: *Southeast Asia, Crossroad of Religions*, Chicago, 1949.

F. LeBar, G. C. Hicky and J. K. Musgrave: *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*. New Haven, Conn., 1964.

R. Burling: *Hill Farms and Padi Fields, Life in Mainland Southeast Asia*. Engelwood Cliffs, N. J., 1965.

Du Bois 教授は戦後東南アジア社会に変化をもたらす要因を分析する。Landon 氏は宗教をとりあげ、LeBer 博士らは民族誌である。Burling 教授は hill tribes と padi farmers とを対置させる。このように人文地理学者よりも文化人類学者の業績の大きいことに注目されるべきだし、人文地理学者として反省させられるべきところだ。

農業の問題については、Stanford 大学の Food Research Institute の「モンスーン・アジアの米穀経済」がまず推賞されなければならない。ただし、これは戦前に出版されたもので、1935年までのデータによっている。戦後20年たった今日、まだこのあとをうすめた東南アジア米穀経済論の刊行されていないことは、私たち農業経済学者の責任といってもよからう。同じことが、Jacoby 博士の「農業不安」についてもいえる。博士は東南アジアの問題をすべて Agrarian Unrest にあるといわれるが、はたしてそうであろうか。これを批判するにたっだけの研究がなければならない。しかし、両書とも東南アジア農業の重要文献である。

V. D. Wickizer and M. K. Bennet: *The Rice Economy of Monsoon Asia*. Stanford, Calif., 1942. (玉井虎雄、広田嘉男訳、モンスーン・アジアの米穀経済、東京、昭33)

E. H. Jacoby: *Agrarian Unrest in Southeast Asia*. New York, 1949. (滝川勉訳：東南アジアにおける農業不安、東京、昭32)

なお、米の技術的問題としては、Grist 博士の「米」が依然として代表的である。しかし、主としてマラヤでの米作の経験にもとづく本書より、もっと広く東南アジア全域の米を対象とする研究が出版されるべきで

あろう。

D. H. Grist : *Rice*. London, 1953.

農業地理の業績としては、なんといっても、現代農業地理学の建設者 Leo Waibel のスクールに属する Yale 大学の Pelzer 教授の「熱帯における開拓の研究」が卓越している。Pelzer 教授はスマトラのプランテーションの歴史的・地理学的研究を多年つづけているが、その出版がせつに期待される。

K. J. Pelzer, *Pioneer Settlement in the Asiatic Tropics*. New York, 1945.

東南アジアの人文地理学的な問題として、その政治的側面、およびその国際関係の側面を無視することはできない。東南アジアの国内政治についての決定版は、コーネル大学の Kahin 教授の編著である。国際関係については、著書・論文が多いが、私は Butwell 教授の簡潔な著書をおす。

George McT. Kahin(ed.) : *Governments and Politics of Southeast Asia*. 2nd ed., Ithaca, N. Y., 1964.

Richard Butwell : *Southeast Asia Today and Tomorrow, A Political Analysis*. New York, 1961.

最後に、東南アジアの人文地理学の問題として逸することのできないのは、華僑である。華僑問題についての世界的権威は、ケンブリッジ大学の Purcell 教授と、コーネル大学の Skinner 教授とであろう。Purcell 教授の研究は、より歴史的、包括的であるのにたいし、Skinner 教授はより現代的、個別的であるといえよう。

Victor Purcell : *The Chinese in Southeast Asia*. 2nd. Ed., London, 1965.

George W. Skinner : *Chinese Society in Thailand, An Analytical History*. Ithaca, N. Y., 1957.

— : *Leadership and Power in the Chinese Community of Thailand*. Ithaca, N. Y., 1958.

以下、ビルマ・タイ・インドシナ3国・マレーシアとシンガポール・インドネシア・フィリピン の6節にわけて、国ごとの重要な文献をあげよう。

3 ビ ル マ

ビルマについての、まとまった人文地理学的研究は、いままでのところ出版されていない。また、その

自然的基礎についても、まとまった文献はない。しかし、1950年から1953年にかけて、New York の Robert R. Nathan Associate Inc. が、ビルマ政府の委嘱によって、ビルマ経済開発計画資料を作成した。その報告書、

K. T. A. *Preliminary Report on Economic and Engineering Survey of Burma for Burma Economic Council*. New York, 1952.

K. T. A. *Comprehensive Report on Economic and Engineering Survey for Economic and Engineering Development of Burma*. New York, 1953.

に収録されているビルマの自然条件についての記述は、その豊富な地図とあいまって、ビルマの自然的基礎についての、最もすぐれたものである。ただ残念なことに、その発行部数がかぎられ、市販されていないから、入手が困難である。

ビルマ研究に熱情をささげた行政官にして学者として有名なのは、Furnivall 氏である。彼は著書が多く、彼の研究業績の研究だけでも1編の論文となる。彼の初期の著作であるビルマの国民経済はビルマ研究の入門書であろう。彼の最後の著書であるビルマとインドネシアとの比較、いいかえるとイギリスとオランダとの植民政政策の比較は、この分野の研究としては最高水準をゆくものである。

J. S. Furnivall : *An Introduction to the Political Economy of Burma*. 3rd ed., Rangoon, 1957.

— : *Netherlands India*. Cambridge. 2nd. ed., 1944.

— : *Colonial Policy and Practice, A Comparative Study of Burma and Netherlands India*. Cambridge, 1948.

ビルマの歴史については、古くは Christian 教授、新しく、Hall 教授、Cady 教授および Woodman 女史のものがある。Woodman 女史のビルマ史は主として国境問題から見たものであり、あまりにも詳細な叙述に入りこんでしまっている。一冊だけあげるとすれば、Hall 教授の簡潔なビルマ史が推賞されよう。

J. L. Christian : *Modern Burma*. Berkeley, 1942.

J. F. Cady : *A History of Modern Burma*.

Ithaca, N. Y., rev. ed., 1960.

D. Woodman : *Making of Burma*. London, 1962.

D. G. E. Hall : *Burma*. 3rd. ed., London, 1960.

ビルマの政治問題については、New York 大学の Trager 教授の「福祉国家への道」は、1950年代前半までのビルマの政治課程を簡潔に描いている。しかし、なんといっても、Massachusetts 工科大学の Pye 教授の「政治・個性・国家建設——ビルマの統一への探究」はすばらしい。これは、たんにビルマの政治過程にかんする研究であるだけでなく、ビルマの地理的基礎・歴史的過程の分析からはじまり、社会心理学・文化人類学などの新しい human behavioral sciences の分析用具を駆使したところのビルマ研究の圧巻である。

Frank Trager : *Building a Welfare State in Burma, 1948—1956*. New York, 1958.

Lucian W. Pye : *Politics, Personality and Nation Building, Burma's Search for Identity*. New Haven, Conn., 1962.

ビルマの経済事情については、Andrus 教授の包括的な研究がある。これは、「ビルマ人の経済生活」と題されているが、ビルマの各経済部門についての素直な叙述であり、ビルマの経済地理でもある。

J. R. Andrus : *Burmese Economic Life*. Stanford, Calif., 1947.

Walinsky 氏はさきの Robert R. Nathan Associate Inc. の1員としてビルマ経済調査に参加し、その後ビルマ政府の経済計画に参画した。この経験をもとにして、1951年から60年に至る間のビルマ経済発展の遡大な記録をものにしていく。彼の「低開発国経済計画理論」の一読は、この遡大な著書の理解を助けよう。

Louis J. Walinsky : *Economic Development in Burma, 1951—1960*. New York, 1962.

—— : *The Planning and Execution of Economic Development*. New York, 1963.

ビルマ経済の動向については、ビルマ政府から毎年出版される経済年報が非常にすぐれている。これだけでなく、ビルマ政府は、東南アジア諸国のうちでは、きわだってしっかりした多くの報告書を刊行している。それ以外の出版物が少ないから、政府刊行物とはとりわけ注意されなければならない。

Government of the Union of Burma : *Economic Survey of Burma*. Rangoon, Yearly Publication.

なお、ビルマにかんして、文化人類学にもとづく村落調査としては、かの有名な Leach 教授の「高地ビルマ人の政治組織」がある。ほかに、Brant 氏の短い調査がコーネルの東南アジア研究計画からだされている。ビルマは文化人類学的調査として、大いにしがいのある国だといえようが、現在ではこの国のとる鎖国的中立政策のために不可能であるが。

E. R. Leach : *Political Systems of Highland Burma*. Cambridge, Mass., 1954.

Charles S. Brant : *Tadagale, A Burmese Village in 1950*. Cornell University Southeast Asia Program Data Paper, Ithaca, N. Y., 1954.

4 タ イ

タイについて最初にまとめた地理学的研究は、もはや30年まえに出版された Credner 博士の「タイ人の国・シャム」である。彼は、Waibel 門下の逸才、当時の旅行困難なタイをよく踏査し、典型的なタイ地誌をあらわした。しかし、その自然的基礎にかんする部分はともかく、社会経済的側面についての叙述は、もう歴史的な価値しかない点が多いといってよい。本書は戦時中に訳出刊行されたが、実際は抄訳であって、残念ながら真価をよく伝えていない。

Wilhelm Credner : *Siam, das Land der Thai*. Stuttgart, 1935.

タイの地誌として、現在、決定版になっているのは Pendleton 博士の遺稿を Kingsbury 氏らが協力してまとめあげた「タイ」である。もともと Pendleton 博士は土壌学者であり、広く東南アジア諸国で活躍したが、晩年はバンコクにおちつき、こよなくタイを愛したという。その反映といおうか、本書は自然条件はもちろんだが、タイの歴史や文化にもふれ、また土壌学者であっただけに農業地理としてもすぐれている。文献も豊富であり、あらゆる人文地理学上の問題を網羅しているといつてよい。Pendleton 博士は多くの論文を出したが、そのうち、いまなお、「ラテライト」と「東北タイの土地利用」の2論文は必読のものであろう。

Robert L. Pendleton : *Thailand, Aspects of Landscape and Life*. New York, 1962.

——：“Laterite and Its Structural Uses in Thailand and Cambodia.” *Geographical Review*, 1941.

——：“Land Use in Northeastern Thailand.” *Geographical Review*, 1943.

タイについては、地理学者による断片的な論文はいくつかあるが地理学者の研究としては、このCredner, Pendleton 両博士のそれにとどめ、むしろ地理学者以外の手になるタイのまとまった研究だけをとりあげよう。

タイの概説書としては、戦時中に出版されたThompson 氏の「タイ」、あるいは1957年太平洋科学会議がバンコクで開催されたとき配布された「タイ——現在と過去」、新しくは Exell 氏の「タイの土地と人」などがある。しかし、タイについての科学的な概説書としては、Human Relations Area Files から刊行された Sharp 教授を編者とする「タイ」であろう。Cornell 大学のSoutheast Asia Program はタイ研究に主力をそそぎ、Bangkok office を設け、Bangkok 郊外の Bang Chang を調査村とした。Sharp 教授がそのリーダーであったが、「タイ」はこの研究の副産物といってよからう。それだけに、予報的性格が強く、また文化人類学者にかたよっていた。HRAF としては、そこで Country Survey Series の1冊として新しく Blanchard 博士編集の「タイ」を刊行した。これはタイの概説書として、ほとんどすべての項目をとりあげ、広く読まれている。もっとも、それだけに、つっこみかたがたりないとの批判もある。

V. Thompson : *Thailand, the New Siam*. New York, 1941.

Ninth Pacific Science Congress : *Thailand, Past and Present*. Bangkok, 1957.

F. K. Exell : *The Land and People of Thailand*. London, 1960.

Laurence Sharp(ed.) : *Thailand*. New Haven, Conn., 1956.

W. Blanchard(ed.) : *Thailand, Its People, Its Society, Its Culture*. New Haven, Conn., 1958.

このコーネルのBang Chang調査からは続々と出版物が刊行されている。Sharp博士編集のpreliminary report から、近刊の Smith 教授の心理学的研究成

果にまで至る。たしかに、これは劃期的なプロジェクトであった。

L. Sharp(ed.) : *Siamese Rice Village : A Preliminary Study of Bang Chang, 1948—1949*. Bangkok and Ithaca, N. Y., 1953.

タイの文化人類学的村落調査としては、いままでのところ、つぎの4冊をあげることができる。そのうち概説としては、de Young 教授のが最ともまとまっている。

J. E. de Young : *Village Life in Modern Thailand*. Berkeley and Los Angeles, 1955.

H. K. Kaufman : *Bangkhuad, A Community Study in Thailand*. Locust Valley, N. Y., 1960.

K. Kingshill : *Ku Daeng, the Red Tomb, A Village Study in Northern Thailand*. Chiang-mai, 1960.

T. M. Fraser : *Rusembilan : A Malay Fishing Village in Southern Thailand*. Ithaca, N. Y., 1960.

最後のものは、南タイにおけるマラヤ系タイの漁村調査である。なお、タイ北部の山地少数民族については、Young 氏の業績がバンコクの Siam Society から刊行されている。

O. G. Young : *The Hill Tribes of Northern Thailand*. Bangkok, 1962.

タイの政治については、Cornell group に属している Wilson 教授の著書がある。これはタイ政治にかんするいままでのところ、唯一の専門書として高く評価されている。

D. A. Wilson : *Politics in Thailand*. Ithaca, N. Y., 1962.

タイの経済について定評のあるのは Ingram 教授が1850年以来のタイ経済の発展のあとを分析した「タイの経済変化」である。教授はこの仕事をなおコツコツとつづけられており、タイ米の分析の論文がある。これにたいし、現状分析と経済計画としては、世界銀行の調査報告は高く評価されている。これは、珍しくタイ語訳が出版されている。タイ経済の分析として、Mousny 氏の近著「タイ経済——自由為替政策の評価」に、東南アジア諸国のなかでタイの経済が安定し繁栄しうる事実の要因分析がある。

J. C. Ingram: *Economic Change in Thailand since 1850*. Stanford, Calif., 1955.

—: Thailand's Rice "Trade and Allocation of Resources" in C. D. Cowan(ed.): *The Economic Development of South-East Asia*. London, 1964.

The International Bank for Reconstruction and Development: *A Public Development Program for Thailand*. Baltimore, 1959.

Andre Mousny: *The Economy of Thailand, An Appraisal of a Liberal Exchange Policy*. Bangkok, 1964.

タイは、ビルマと同様に政府刊行物として注目すべきものも多い。たとえば農業経済関係でも、Sawaeng 農務次官補と Ong FAO 専門家との共著「タイの米穀経済」はタイ農務省から刊行されている。

Sawaeng Kulthengham and Shao-er Ong: *Rice Economy of Thailand*. Bangkok, 1964.

とくに、総理府統計局の年鑑はタイの研究には不可欠である。また、国勢調査、あるいは経済企画庁をはじめとする諸官庁の出版物に十分な注意が払われる必要がある。

National Statistical Office, Office of the Prime Minister: *Statistical Yearbook of Thailand*. Bangkok, Yearly Publication.

なお、タイの農業経済関係の文献については、

本岡 武:「タイ国における農地問題と農地制度改革」『東南アジア研究』第2巻 第4号, 1964. p. 21

を参照されたい。

5 ベトナム・カンボジア・ラオス

ベトナム・カンボジア・ラオスの旧フランス領インドシナ3国は、もともとフランスの学者が1940年代までは、ほとんど研究を独占したところである。しかも、フランス人文地理学の伝統が発揮されたところである。したがって、この3国については、人文地理学者の業績が高く評価される。

そのなかでも、さきに東南アジア一般の文献としてあげた Sion 教授の「モンスーンのアジア」は現在モンスーン地理の古典と目されているが、自国の植民地であった関係から、とくにこのインドシナに詳しい。

J. Sion: *Asie des Moussons*. Paris, 1929.

人文地理学者の業績としては、Robequain 教授の「フランス領インドシナの経済発展」と「フランス領インドシナ」とがある。いずれも戦時中に刊行されたものであるが、前者は英訳どころか邦訳まで出版され、インドシナ3国の経済発展についての決定版である。また「フランス領インドシナ」は1948年に改訂版が出版され、ディエンビエンフー陥落までの地誌としては最もすぐれている。というより、インドシナ3国の地誌としては唯一のものであろう。なお教授には古くアンナンのタン・ホア省の研究があるが、ひとつの省の研究として、いまなお評価されている。

Charles Robequain: *L'Evolution Economique de L'Indochine Française*. Paris, 1939. (*The Economic Development of French Indochina*. New York, 1944. 松田・岡田共訳, インドシナの経済発展. 東京, 昭30)

—: *L'Indochine Française*. Paris, rev. ed., 1948.

—: *Le Thanh Hoá, Étude Géographique d'une Province Annamite*. 2 vols. Paris and Bruxelles, 1929.

Gourou 教授は、戦前、太平洋問題調査会の太平洋地域諸国の土地利用研究の一環として、「フランス領インドシナの土地利用」をあらわした。これは戦後英訳され、農業地理・農業経済上、最高の文献である。また、教授の「トンキン・デルタの農民」も HRAF より英訳され、スタンダードなものとして知られている。彼はその他の著者・論文が多いが、ここでは2冊をあげるにとどめる。

Pierre Gourou: *L'Utilisation du Sol en Indochine Française*. Paris, 1940. (*Land Utilization in Indochina*. New York, 1947.)

—: *Les Paysans du Delta Tonkinois*. Paris, 1936. (*Peasants of the Tonkin Delta, a story of Human Geography*. New Haven, Conn., 1955.)

さらに、もう1人の地理学者 Delvert 教授の「カンボジアの農民」は、カンボジアを専門とする教授の代表作である。これはカンボジアの気候・土地利用・経済などあますところなく記述された地誌である。このように、人文地理学者の業績がインドシナにおいて

は目立つが、これはまさしくフランス人文地理学の所産である。

Jean Delvert : *Le Paysan Cambodigien*. The Hague, 1961.

しかし、インドシナについてのフランス人学者の研究はしだいに低調になってきている。とりわけ、ディエンビエンフー失陥以来、フランス人のインドシナ研究はまったく放棄されたといつてよい。（この点、本岡武「フランスにおける地域研究」、『学術月報』昭和38年2月号を参照されたい。）そのかわりとして、この地域の研究に登場してきたのが、アメリカ人の研究者である。現在、インドシナ3国について、最も要領をえた概説書は、やはり HRAF の地域双書であろう。これには、Ginsburg 教授編集と Le Bar 博士ほか編集の「ラオス」と、Zadrozny 教授編集および Steinberg 教授編集の「カンボジア」がある。

N. S. Ginsburg(ed.) : *Area Handbook on Laos*. New Haven, Conn., 1955.

Frank Le Bar and Adrienn Suddard(eds.) : *Laos, Its People, Its Society, Its Culture*. New Haven, Conn., 1960.

M. G. Zadrozny(ed.) : *Area Handbook on Cambodia*. New Haven, Conn., 1955.

David Steinberg and others(eds.) : *Cambodia, Its People, Its Society, Its Culture*. New Haven, 1957.

インドシナの歴史を理解するためには、Chesneaux 教授、Briggs 教授など、それにフランス植民政策を知るには、Roberts 氏や Thompson 氏の名著がある。

Lawrence Palmer Briggs : *The Ancient Khmer Empire*. New York, 1951.

Jean Chesneaux : *Contribution L'Histoire de la Nation Vietnamiennne*. Paris, 1955.

S. H. Roberts : *History of French Colonial Policy, 1870—1925*. 2 vols., London, 1929.

Virginia Thompson : *French Indo-china*. London, 1937.

その後の状況の発展については、Cady, Cole, Lancaster の諸氏のものが重要だといわれている。

J. F. Cady : *The Roots of French Imperialism in Eastern Asia*. Ithaca, N. Y., 1954.

A. B. Cole : *Confliction in Indochina and*

International Repercussions, A Documentary History, 1945—1955. Ithaca, N. Y., 1956.

Donald Lancaster : *The Emancipation of French Indo-china*. London, 1961.

P. Huard et M. Durand : *Connaissance du Viet-Nam*. Paris, 1954.

なお、インドシナ3国の地理学的文献としては、ECAFE が刊行している洪水統禦双書なる一連の報告書、とくにメコン河下流地域の水資源開発計画報告書をおす。

ECAFE : *Development of Water Resources in the Lower Mekong Basin*. Flood Control Series, No. 12. Bangkok, 1957.

なお、政府刊行物としては、ラオスおよびカンボジアのそれはとるにたらない。南ベトナムは戦乱状態がつづいている。北ベトナムには、厚いベールがかぶっている。このように、インドシナ3国では、いままでのところ政府刊行物にはほとんど期待できない。

6 マレーシア

1963年9月、マラヤ・シンガポール・北ボルネオ・サラワクでもってマレーシア連邦が結成されたが、1965年8月シンガポールが脱退した。ここでは、依然、マレーシアとして、マラヤ、シンガポール、旧英領ボルネオ（北ボルネオ・ブルネイ・サワラク）をとりあつかう。そして、マレーシアをマラヤと旧英領ボルネオとに分ち、マラヤにシンガポールを含ませる。

(1) マラヤ

マラヤの人文地理概説としては、上述の Robequain 教授、あるいはマラヤ在勤の経験のながい Dobby, Fisher 両教授の東南アジア地誌が、まず推賞されよう。マラヤだけを対象としたものには、Ginsburg 教授・Roberts 教授共著の「マラヤ」、またシンガポール大学の Ooi Jin-Bee 博士の近著「マラヤの土地・住民および経済」が、きわめて適切な入門書となる。後者は Geographies for Advanced Study の1冊として刊行され、東南アジアの国別地誌としては類例のないほどの、立派なできばえのものである。

N. S. Ginsburg and C. F. Roberts, Jr. : *Malaya*. Seattle, 1958.

Ooi Jin-Bee : *Land, People and Economy in Malaya*. London, 1963.

マラヤにかんしては、英領当時から研究がきわだつて進んできている。もともと、東南アジアのうちでよく研究された地域としては、英領マラヤとのほか蘭領東インドとがあげられる。しかし、蘭領東インドの面積ならびに人口は英領マラヤの10倍以上である。したがって、最もインテンシブに研究された地域は、ここ英領マラヤである。ことに、1947年以来刊行されている *The Malayan Journal of Tropical Geography* は、主としてマラヤの地理論文を中心としている。また、マラヤ大学およびシンガポール大学の地理学教室は、東南アジアの大学の地理学研究室としては、最もしっかりしていることにも注意されたい。

マラヤの歴史については、Wheatley 教授の諸論文と Winstedt 卿の諸著者とのが定評がある。

R. O. Winstedt : *Britain and Malaya, 1786—1941*. London, 1944.

—— : *The Malays, A Cultural History*. Singapore, 1947.

—— : *Malaya and Its History*. London, 1949.

また Purcell 教授は、マラヤで多年行政官として勤務したのち、現在ケンブリッジで教鞭をとっているが、みずからのマラヤでの行政と研究とにもとづく「マラヤの華僑」が、マラヤの理解にきわめて重要な文献である。

V. W. Purcell : *The Chinese in Malaya*. Oxford, 1948.

社会人類学者として世界的に有名なロンドン大学の Firth 教授の「マレーの漁民」は、マレー人社会の理解のためのみならず、社会人類学の研究方法上、高く評価されている。マレー関係文献として逸することのできないものである。

Raymond Firth : *Malay Fishermen, Their Peasant Economy*. London, 1946.

経済問題としては、いろいろな文献がでているが、Silcock, Fisk 両教授編集のものが、よく問題をまとめている。

T. H. Silcock and E. K. Fisk : *The Political Economy of Independent Malaya, A Case-Study in Development*. Singapore and Canberra, 1963.

農業関係として、Burkill 氏の Dictionary は、いかにイギリスがマラヤのプランテーション農業の開発

に力を注いだかをよく示すものである。また、Grist 氏の「マラヤ農業概観」は、さすがに多年の経験にもとづくだけに、よくまとまっている。どちらも戦前のものだが、まだ今日十分な価値がある。

I. H. Burkill : *Dictionary of Economic Products of the Malay Peninsula*. 2 vols. London, 1935.

D. H. Grist : *Agriculture in Malaya*. London, 1936.

農業地理関係の論文は *Malayan Journal of Tropical Geography* に非常に多い。ここでは紹介をばこう。

マラヤについては官庁報告は、豊富だし、よく整備されている。もともと、このことは英領植民地の特徴であろうが、ビルマをはるか凌駕している。

世界銀行がマラヤの今後の経済開発について報告書を刊行している。これはマラヤの経済を論ずるときぜひ一読されるべきである。

The International Bank for Reconstruction and Development : *Economic Development of Malaya*. Singapore, 1955.

(2) 旧英領ボルネオ

旧英領ボルネオについては、まとまった著書はほとんどない。ただ、HRAF の地域双書の1冊として Ginsburg 教授によって編集された「英領ボルネオ」が最適の入門書となっている。

N. S. Ginsburg(ed.): *Area Handbook on British Borneo*. New Haven, Conn., 1955.

シンガポール大学 Tregonning 教授の「北ボルネオ」は英政府出版物だけに定評がある。

Kennedy G. Tregonning : *North Borneo*. London, H. M. S. O., 1960.

ただ、英領北ボルネオおよびブルネイにはそれぞれイギリス植民省刊行の年次報告がある。

Colonial Office, *Report on Borneo*. London, H. M. S. O., Yearly Publication.

—— : *Report on North Borneo*. London, H. M. S. O., Yearly Publication.

7 インドネシア

インドネシアについての文献は非常に多い。たとえば、Legge 教授の要領をえた近著「インドネシア史」

の末尾にある文献目録を一読しても、たいへんな数にのぼることがわかる。この書物のなかで Legge 教授が指摘しているように、インドネシアの研究の中心は、オランダからアメリカ、とくに Cornell Modern Indonesian Project, MIT の Center for International Studies, Yale の Southeast Asia Studies Program などに移ってしまった。したがって、アメリカからどしどし文献が出版されている。このアメリカに刺激されて、現在オランダの数少ないが、しかし有能な研究者は、またその成果を英語で発表している。この意味でインドネシア研究は戦後、非常に変わってしまったといえよう。

J. D. Legge : *Indonesia*. Englewood Cliffs, N. J., 1965.

ところが、それほど文献が多いにもかかわらず、インドネシアの人文地理学として、まとまったものはない。わずかに、Robequain, Dobby, Fisher 諸教授の東南アジア地誌のインドネシア編が入門書として役立つであろう。Helbig 教授の「東南アジア島嶼」はドイツ的地誌であり、実地踏査に弱い欠点がある。戦前、オランダ総督府が出版した「熱帯オランダ地図帳」はすばらしい。これはいまなお貴重なものであり、これをひもといてゆくにつれ、おのずからインドネシアの人文地理が明らかになってくる。

K. Helbig : *Die Südostasiatische Inselwelt*. Stuttgart, 1949.

Koninklijk Nederlandsch Asiatisch Genootschap : *Atlas van Tropisch Nederland*. Batavia, 1938.

インドネシアの概説書としては、なんといっても、HRAF の「インドネシア」がとどめをさすだろう。インドネシア研究の第一人者、すなわち、K. J. Pelzer (地理・農業), H. Geertz (文化と社会), D. S. Paauw (経済), E. D. Hawkins (労働), R. V. Niel (歴史), H. Feith (政治), A. H. Johns (文学), M. Hood (伝統芸術) が担当している。また、270冊におよぶビブリオグラフィーも立派である。「インドネシアについて1冊の文献を」といわれるときには、必ずや本書があげられるにちがいない。

R. T. McVey (ed.) : *Indonesia*. New Haven, Conn., 1963.

インドネシアの自然的基礎をとりあつかったものは

多いが、地質学における Van Bemelen 教授、土壌学における Mohr 博士の業績は、いまなお決定版といえよう。

R. W. Van Bemelen : *Geology of Indonesia*. The Hague, 1949.

E. C. J. Mohr : *Soils of Equatorial Regions with Special Reference to the Netherlands East Indies*. Ann Arbor, 1944. (originally published in 1933—1938.)

インドネシアの歴史・社会の概説としては、最もすぐれたものは、Wertheim 教授の「変わりゆくインドネシアの社会」であろう。インドネシアの歴史概説としては、Vlekke 氏のが推賞される。

W. F. Wertheim : *Indonesian Society in Transition*. 2nd ed., The Hague and Bandung, 1959.

B. H. M. Vlekke : *Nusantara*. The Hague and Bandung, Rev. ed., 1959.

インドネシアの知識の要領をうるためには、つぎのようなものが推されよう。

Dorothy Woodman : *The Republic of Indonesia*. London, 1955.

Willard A. Hanna : *Bung Karno's Indonesia*. New York, 1961.

Louis Fisher : *The Story of Indonesia*. New York, 1959.

Bruce Grant : *Indonesia*. Melbourne, 1964.

この概要的知識を背景として、インドネシアの政治については、Kahin 教授をリーダーとする Cornell Modern Indonesia Project の業績が高く評価される。このコーネルのグループのうち、私はとくにつぎの2冊をおす。

Harry J. Benda : *The Crescent and the Rising Sun, Indonesian Islam*. The Hague, 1958.

Herbert Feith : *The Decline of Constitutional Democracy in Indonesia*. Ithaca, N. Y., 1962.

インドネシアの民族・社会にかんしては、Kennedy 博士の戦時中の「インド諸島の島々と人々」とがまとまっており、また同博士の HRAF からの民族文献目録がよい。さらに、最近、続々と発表されているシカゴ大学の Geertz 教授の諸業績はすばらしい。

R. Kennedy : *Islands and Peoples of the Indies*.

Washington, 1943.

—: *Bibliography of Indonesian Peoples and Cultures*. New Haven, 1945.

Clifford Geertz: *The Religion of Java*. Glencoe, Ill., 1960.

—: *Peddlers and Princes, Social Change and Economic Modernization in Two Indonesian Towns*. Chicago, 1963.

—: *Agricultural Involution*. Berkeley and Los Angeles, 1963.

戦前の経済については、Boeke, Broek, および Stikker 諸博士のものがすぐれている。ただ、独立後のインドネシア経済の構造変化について、まとまった研究が発表されていない。

J. H. Boeke: *Structure of the Netherlands Indian Economy*. New York, 1942.

—: *Economie van Indonesie*. Haarlem, 1951.

J. O. M. Broek: *Economic Development of the Netherlands East Indies*. New York, 1942.

A. H. Stikker: *Leerboek der Economie voor Indonesie*. Groningen, 1942.

農業問題の文献も多い。Ladejinsky 氏が戦争直前に書いた「蘭領インド農業」は土地制度史側面から見て重要である。インドネシア農業の総括的なものとしては、Metcalf 氏の「インドネシア農業」がよい。

W. L. Ladejinsky: "Agriculture of the Netherlands Indies." *Foreign Agriculture*. 1940.

J. E. Metcalf: *Agricultural Economy of Indonesia*. U. S. D. A., Washington, 1952.

8 フィリピン

フィリピン地理についてのスタンダード・ブックになるのは、戦時中にドイツで出版された Kolb 教授の「フィリピン」である。これは、タイについての Gredner 博士の業績に匹敵し、ドイツ地理学の名譽をまもるものである。これにたいし、土地利用と人口の問題については、前出の Pelzer 教授のもののほか、Spencer 教授の「フィリピンの土地と人」がすぐれている。Spencer 教授は東南アジア地理のうち、とくにフィリピンを専攻しているだけあって、現在のところ、これが最も手ごろなフィリピン地誌だといえよう。なお、戦前のもので入手しがたいが、フィ

リピン農商務省から刊行された「フィリピン統計地図帳」は、いまなお利用価値が高い。

Albert Kolb: *Die Philippinen*. Leipzig, 1942.

Karl J. Pelzer: *Pioneer Settlement in the Asiatic Tropics*. New York, 1945.

Joseph E. Spencer: *Land and People in the Philippines*. Berkeley, 1954.

Department of Agriculture and Commerce, Commonwealth of the Philippines: *Atlas of Philippine Statistics*. Manila, 1939.

地理学者以外のものによるフィリピン概説書としては、シカゴ大学の文化人類学者 Eggan, Hester 両教授および地理学者 Ginsburg 教授によって編集された「フィリピン」が最もすぐれている。(アメリカでは現在シカゴ大学がフィリピン研究に最も強い。) またコーネル大学から出版されているミメオグラフの「フィリピン」は、社会・政治・経済を主とした概説書である。

F. Eggan, E. D. Hester and N. S. Ginsburg: *Area Handbook on the Philippines*. Chicago, 1956.

G. D. Berreman: *The Philippines, A Survey of Current Social, Economic, and Political Conditions*. Cornell University Southeast Asia Program Data Paper No. 19. Ithaca, N. Y., 1956.

フィリピンの歴史については文献が多いが、Alip 氏の「フィリピン史」概説と、Hayden 氏の政治を主とした「フィリピン」がよいといわれている。

E. M. Alip: *Philippine History*. Manila, 1948.

J. R. Hayden: *The Philippines*. New York, 1945.

経済関係としては、コーネル大学の Golay 教授「フィリピン——その国民経済発展」が最も権威あるものとされよう。おそらく、Spencer 教授と Golay 教授との2冊がフィリピンの人文地理学文献としてかくことができないものであろう。しかし、本誌上の私のフィリピン大学訪問記にも明らかなように、この大学を中心として、フィリピン人自身による研究がどしどし進んでいる。たとえば経済関係にしても、フィリピン経済学界の大御所 Castillo 教授のものもあれば、新進の Sicat 教授のものもある。

F. H. Golay : *The Philippines, A Study in National Economic Development*. Ithaca, N. Y., 1961.

A. V. Castillo : *Philippine Economics*, Manila, 1949. Sicat(ed.) : *The Philippine Economy in the 1960's*. Quezon City, 1963.

フィリピンの民族については、それがきわめて複雑多様なだけに、文献も多い。ここでは、Keesing 教授の「太平洋地域の原住民族」だけをあげておこう。

F. M. Keesing : *Native Peoples of the Pacific World*. New York, 1945.

「フィリピン群島の農業地理」が戦争直後にアメリカ農務省より出版されたが、これはいまなお価値が多い。フィリピン農業の大きな問題は土地制度にあるが、これについては、前掲 Sicat 編著収載のミネソタ大学の V. Ruttan 教授の論文がよい。Ruttan 教授は、Los Baños の The International Rice Research Institute にわずか2カ年在勤したが、その間多くの mimeograph をだしており、それぞれが注目に値す

る。

R. G. Hainsworth and R. T. Moyer : *Agricultural Geograph of the Philippine Islands*. Washington, 1945.

その他、フィリピンについては雑誌論文が非常に多いが、ここでは省略する。地理学者にはよらないが、地理学的業績として高く評価されなければならないのは、国内交通にかんし Stanford Research Institute の行なった大規模な調査報告である。これは交通地理上の重要な文献であるだけでなく、フィリピンの自然的基礎をよく調査している。自然地理学上のよい文献である。

なお、フィリピンはアメリカの影響のもとに政府出版物が着々としてでている。またフィリピン大学からの刊行物も注目すべきものがあらわれはじめてきた。したがって、これからフィリピン文献としては、政府および大学の、あるいはまたマニラからの刊行物に十分な注意を払い、われわれの研究を up-to-dateなものにする必要があると思われる。